『御堂関自集』読解考

妹尾好信

はじめに

『御堂関自集』は、道長個人の家集ではなず、道長とその周辺の人々の間で交わされた私的な訳歌を集めた集である。歌は諸作年時順に配列されており、詞書の記事内容は『御堂関自記』その他の史科と照合することが可能。道長の道流相も含め、当時の人々の生活や景観を知ることができる貴重な資料であると思われる。

次に、この集の性格と、特に詞書の部分に注目させていただくことにしましょう。詞書は、道長の道流相を含め、当時の人々の生活や景観を知ることができる貴重な資料であると思われる。

すなわち、

①歌词群；寛弘二年詠（1-25番歌）
②第二歌群；寛弘三年詠（26-45番歌）
③第三歌群；次年不明詠（46-73番歌）

二十七首（他に末尾に

の三つである。歌词群については『国文学研究資料館秘書』第二十六号合12・3刊行予定に、第二歌群については『島原国書館秘書』第十五号合12刊行予定に発表されている。また、『平家歌集成』にも収録されています。

本集を研究する際には、これらの資料を参照することが重要である。
ところがその時、時雨がひと下りしてきたので、一行はある小屋に立ち寄り、雨を遮る布や焼けた年切りをあおって、お茶をいただきます。そのあたりの景色を眺めながら、旅のsystem.
他の道長の息子たちはと言えば、能信息高松上明子（十歳）二人は寛弘三年十二月十五日に同時に元服するので、この時点で生まれたてである。

以上により、少将の君は頼通『兵衛の佐』は寛宗であると思えない。とおりに俳句に仕える若千ての武官であろう。

さて、二人は立ち寄った小家で、主人に水を所望した。時雨模様の頃であるから、喉のはがす深い季節ではなければ、息ぎ切って雨宿に窓けたんだためか、あるいは、嵯峨野道路は遊覧で、獲物を連れていき、それに差し出された水に入った土瓶に、歌を首書かれてあったのである。昔を恋い暮らしながら暮らしているこの家に、時雨の雨を降らせる空の旅人はいつの日かと問っている。『時雨降らす』後を追い回っていたので喉が乾いたのでもある。

そこに差し出された水に入った土瓶に、歌が首書かれてあったのである。昔を恋い暮らしながら暮らしているこの家に、時雨の雨を降らせる空の旅人はいつの日かと問っている。『時雨降らす』後を追い回っていたので喉が乾いたのでもある。

いったたいこの家の主人は何者なのか、嵯峨野は皇族や高級貴族の別荘や寺院の多い所として知られるが、貴族たちの出家、隠棲の地でもあった。光源氏も晩年在家として嵯峨院に住んだことが宿木の記事によって知られるし、実実は、今、中書王兼親王が晩年の過ごしが在っている。

「霧の上人と呼ばれる殿上人を言う言葉だろう。」と、若貴公二人の姿を見て、小家のあらじは、懐旧の涙を誘われたというのである。

このときの主人は何者なのか、嵯峨野は皇族や高級貴族の別荘や寺院の多い所として知られるが、貴族たちの出家、隠棲の地でもあった。光源氏も晩年在家として嵯峨院に住んだことが宿木の記事によって知られるし、実実は、今、中書王兼親王が晩年の過ごしが在っている。

「霧の上人と呼ばれる殿上人を言う言葉だろう。」と、若貴公二人の姿を見て、小家のあらじは、懐旧の涙を誘われたというのである。

このときの主人は何者なのか、嵯峨野は皇族や高級貴族の別荘や寺院の多い所として知られるが、貴族たちの出家、隠棲の地でもあった。光源氏も晩年在家として嵯峨院に住んだことが宿木の記事によって知られるし、実実は、今、中書王兼親王が晩年の過ごしが在っている。

「霧の上人と呼ばれる殿上人を言う言葉だろう。」と、若貴公二人の姿を見て、小家のあらじは、懐旧の涙を誘われたというのである。

このときの主人は何者なのか、嵯峨野は皇族や高級貴族の別荘や寺院の多い所として知られるが、貴族たちの出家、隠棲の地でもあった。光源氏も晩年在家として嵯峨院に住んだことが宿木の記事によって知られるし、実実は、今、中書王兼親王が晩年の過ごしが在っている。

「霧の上人と呼ばれる殿上人を言う言葉だろう。」と、若貴公二人の姿を見て、小家のあらじは、懐旧の涙を誘われたというのである。
年ふれはわがころかもしら河のみづかやで古いけりか

かしこ名たかく事のも女にたな侍りる

とある有名な箱塚屋伝説も似ている。『大和物語』第二三六段

では野大武小野好古と箱塚の御との話として歌物化されてお

り、やや内容も異なるが、歌詞として著名な話であった。この44

番歌の話事であるなら問題はないが、もし虚構であるならば、

この箱塚伝説を念頭に置いて作られた話であるかも知れない。主人公

は男であるとも女であるとも書かれていないから、かつて宮廷の

頭の家に女官や女房として仕えたとのある女性であった可能性も

ある。そうならば、彼女は自らを箱塚にたなたしてこの歌を詠み

と見ることもできるであろう。

この歌の詞書は、『集より箱塚にたなたしてこの歌を詠みたす』の部分以外には歌詞が用いられ

てない。集まった箱塚にたなたしてこの歌を詠みたす

としての人々は、供人

と離宗を含むかのかなりの人数の団である。歌詞がないのは、供人

を基準にして従者階級の視点で記述されているからであろう。

『御

堂関白集』の詞書には、道長家、特に中宮家子に仕える供人の視点

で記述されている例がいくつか見出されたが、ことわざは明らかに女

房ではなく男性従者の視点によってある。編纂者の姿勢が現われる

とところである。

弘二年（一〇五九）の末頭から十月に応じて

なお、この歌は『秋風集』巻十七・雜上・一二六に

かまりて侍りけるにしぇりのみじうしわけば、あやしき

こにたちやどりて侍りけるに、あらじのよみてざした

りけるよう

たれぞこのむかしをこゆるかやどに時雨かふるるあきのたび

という形で収められている。『御堂関白集』を典拠としたものと思

われるが、『法性寺の入道前政政するにあらじ道長が春の政

というののは誤りである。本集は道長の家族と認識していたが

こととされた曲である。道長が政の終わ

りに限定される。行く秋を旅人にたえた趣になる。

七月ばかりに、一条殿に召し、石山に選ばせ給へ

りける。宮よりても御前よりも日々に御文あり。内侍の

督の殿に

人をのみ思いやりの間にこの頃は間人わは越えぬ日々なさ

（45）ここにまで行きもなくからで逢坂の間ののみは立ち止まる

－71－
七月（十一月）ばかりに、一条殿の上（緑子）を連れて。

詠歌

（私のいる）ここ石山まで行かなかったので、（お妹様は）逢坂

「このことを貴重に」との見解を示された。（二）御堂関自記、詠歌

（一条殿）ばかりに、一条殿の上（緑子）を連れて。

詠歌

（私のいる）ここ石山まで行かなかったので、（お妹様は）逢坂

「このことを貴重に」との見解を示された。（二）御堂関自記、詠歌
業朝臣八嶋従平八月花に於て　（二十九日）　「実成朝臣勅使来　二月　あること
連日勅使が到来している記事と会合しているのである。　敦康親王
が石見に参院している間、道長は、二十七日には志賀寺（崇福寺
に参詣して親王のために説説を行ない、二十九日には八幡（近江国
野洲郡）に巡礼をする」という記事について、二十七日には
十四日には田上（近江国京大郡）に至りて、翌日、暁に石山寺に戻ると
いうように、道長は実に精力的に近在を動きまわっており、なかなか
か誇しうるものである　（御堂関日記）

しかしながら、親王の石山参院に同行した十二歳の姫子によって
立て上がってしまい、不吉な征兵を避けられないのである。姫
子は寛弘元年　（一〇四四）　十一月十一日　十二歳　尚侍に任じた
（御堂関日記）　ので、この時、内侍の肩の役として同行させられた
する。しかし、そんな幼い男の子を相手にしても面白いかは知れない。だか
ら姫子は、紙かの手紙に描くことが多くなかったのである。ただ

杉谷氏は、この贈答を道長と姫子の間で交わされたものと見てお

-73-
おわりに

寛弘二年（〇〇五）の詠歌を集めた第三歌群は、正月早々に道長が中宮を参詣して贈った際の詠歌に始まり、春には祝賀的な歌が並ぶ。そして初夏には出仕の続く左閥門主役の歌、五月には進の内侍との塵子についての詠歌、また公任からの贈られた塵子の歌を終る。さらに、八月下旬に詠歌が上野に下向するのにお際して、小少将の歌を贈った等、小魂の詠歌が随所に見られる。

初夏には「宮を訪れた歌と題する、春には祝賀的な歌が並ぶ。そして初夏には出仕の続く左閥門主役の歌、五月には進の内侍との塵子についての詠歌、また公任からの贈られた塵子の歌を終る。さらに、八月下旬に詠歌が上野に下向するのにお際して、小少将の歌を贈った等、小魂の詠歌が随所に見られる。